

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 4 号 (6 月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >	作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >
イ ネ	葉いもち ニカメイチュウ (第 1 世代)	並 (並) 並 (並)	チ ヤ	カンザ ^レ ワハダ ^ニ	山城: 多 (多) 丹波: 並 (並) 丹後: 並 (やや少)
	ヒメトビ ^ウ ンカ 縞葉枯病 ツマク ^ロ ヨコハ ^イ イネミス ^ソ ウムシ	やや少 並 やや少 (やや少) 並 (やや少)		チャノミドリヒメヨコバイ	山城: 多 (多) 丹波: 多 (多) 丹後: 並 (並)
ナ シ	黒斑病 黒星病 ハダニ類	並 (やや少) 並 (少) 並 (並)		クワシロカイガ ^ラ ムシ	山城: 並 (やや多) 丹波: やや多 (多) 丹後: やや多 (並)
ブドウ	べと病	並 (少)	果菜類	疫病・ 褐色腐敗病	並 (並)
カ キ	落葉病 うどんこ病	やや少 並 (並)	キュウリ	べと病	やや多 (やや少)
カンキツ	ハダニ類	並 (やや少)	キュウリ・ トウカ ^ラ シ	斑点細菌病	やや多 (やや少)
果樹全般	カメムシ類	やや多 (やや多)	果菜類	うどんこ病	並 (並)
チ ヤ	もち病	山城: やや多 (並) 丹波: やや多 (並) 丹後: 並 (並)	ネ ギ	さび病 ネギ ^ハ モク ^リ ハ ^エ ネギ ^ア サ ^ミ ウマ	多 (多) 少 (並) やや多 (並)
	チャノコカクモンハマキ	山城: 並 (並) 丹波: 並 (並) 丹後: 並 (並)	野菜類	アブラムシ類と モサ ^イ ク病	並 (並)
	チャノホソカ ^ガ	山城: 並 (やや多) 丹波: やや多 (並) 丹後: やや多 (やや多)	果菜類	ハダニ類 アサ ^ミ ウマ類	並 (並) やや多 (並)
	チャノキイロアサ ^ミ ウマ	山城: やや少 (並) 丹波: 並 (やや多) 丹後: 並 (並)	アブラナ科 野菜	コナガ	やや多

※平年とは過去10年の平均である。

目 次

予報の概要	1
予報本文	2
今後注意すべきその他の病虫害等	16
参考 I 近畿地方1か月予報	17
II 用語の定義	17
III 予報本文の見方	18
IV 短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について	19

予報本文

イネ

1 葉いもち

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、補植用苗での発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
確認ほ場率(%)	0.0	0.0

(2) 前年の穂いもちの発生量は平年比多かった（+）。

項目	昨年9月	平年値
発病株率(%)	22.7	2.8
確認ほ場率(%)	61.1	14.2

(3) 向こう1か月の気温は平年比高く（-）、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多く（+）、日照時間は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または少ない（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 空気伝染し、発病適温は14～30℃（最適25℃）である。降雨あるいは霧などによって長時間イネが濡れ続ける場合は感染に好適である。湿度が高いと病斑の進展、胞子の形成量は高まる。

(2) 通常、6月第5半旬頃が初発時期である。

(3) 補植用苗をそのまま放置すると、葉いもちの発生源となる。補植後、速やかに残り苗を処分する。

(4) ほ場を見回り、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に、畑作跡では注意する。

(5) 長期持続型箱施用剤を使用していない多肥田や山間、山沿い等の発生しやすいほ場では、曇雨天が続く場合、6月中旬頃に予防のため粒剤などを施用する。

(6) 平成25年度に中丹地域、平成26年度に南丹地域の一部においてストロビルリン系薬剤（QoI剤）耐性菌の発生を確認した。耐性菌の発生地域ではいもち病に対するQoI剤の使用を中止し、他系統の薬剤（抵抗性誘導剤、MBI-R剤等）を使用する。QoI剤を使用したほ場で、防除効果の低下が疑われる場合は、他系統の薬剤で追加防除を行うとともに、速やかに病害虫防除所または、関係機関に連絡する。詳細は京都府病害虫防除所ホームページ

(http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news20131113_2.pdf) を参照のこと。

2 ニカメイチュウ（第1世代）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 前年8月に第2世代幼虫の発生を認めておらず（平年並）、越冬量は平年並と予想される。

項目	昨年8月	平年値
被害株率(%)	0.0	0.0

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、越冬世代成虫の発生最盛期は6月第4半旬頃である。
- (2) 稲ワラや刈り株等で幼虫越冬し、年2回発生する。
- (3) 稲ワラ（敷ワラ）を使用する野菜・チャ・イチジク栽培地域等で発生しやすい。
- (4) 6月末に葉鞘変色茎の割合が全体の5%以上の場合、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

3 ヒメトビウンカと縞葉枯病

予報内容 発生量：ヒメトビウンカ 平年比やや少ない
縞葉枯病 平年並

予報の根拠

- (1) ヒメトビウンカの越冬虫数は平年比少なく（－）、確認ほ場率は平年比低い（－）。

項目	本年	平年値
虫数(頭)	0.0	0.8
確認ほ場率(%)	0.0	32.7

*虫数は、20回振りすくい取り調査。

- (2) 昨年は、縞葉枯病の発生を認めていない（平年並）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ヒメトビウンカはイネ科雑草で越冬するため、前年の発生状況等が翌年の発生に影響する。
- (2) 通常、ヒメトビウンカ第1世代成虫の発生最盛期は6月第3半旬頃である。
- (3) 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介され経卵伝染する。

4 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) ツマグロヨコバイの越冬虫数は平年比やや少なく（－）、確認ほ場率は平年比やや低い（－）。

項目	本年	平年値
虫数(頭)	0.4	3.3
確認ほ場率(%)	18.8	30.2

*虫数は、20回振りすくい取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 4齢幼虫でイネ科雑草において越冬する。
- (2) 直接吸汁加害する他、萎縮病等を媒介する。

5 イネミズゾウムシ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 前年の新成虫の予察灯への誘殺数は平年比やや少ない（－）～並。

地域	7月1半旬～8月6半旬の誘殺数(頭)	
	27年	平年値
京田辺市	27	56.7
亀岡市	168	137.9
京丹後市	29	65.1

(2) 5月中旬現在、本田での発生量は平年並。

項目	本年	平年値
食害株率(%)	21.7	18.4
虫数(頭/25株)	2.9	2.1
確認ほ場率(%)	50.0	61.7

(3) 5月第2半旬現在、越冬世代成虫の予察灯への誘殺数は京田辺及び亀岡で平年並、京丹後で平年比多い(+)

地域	4月1半旬～5月2半旬の誘殺数(頭)	
	本年	平年値
京田辺市	0	0.1
亀岡市	22	21.7
京丹後市	73	11.7

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の新成虫が越冬し、田植え後、水田に侵入して葉を食害する。5月中下旬から卵を産む。
- (2) ふ化した幼虫が土中で根を食害する。
- (3) イネが根腐れするような水田では幼虫の被害が出やすいので、深水を避け、根を健全に保つ。
- (4) 浅水管理は成虫の産卵行動を阻害し、産卵場所を制限する効果がある。
- (5) 粒剤の育苗箱施用の効果が高い。なお、イネドロオイムシの常発地では、この方法でイネドロオイムシも合わせて防除ができる。
- (6) 育苗箱施用剤を使用しなかった場合や田植え後発生が多く、成虫が株当たり0.3頭を越える場合は、そのまま放置すると経済的被害が発生するので、薬剤散布を行う。

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬の発生量は平年並。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	0.8	1.4

- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 葉が繁茂する梅雨期は、本病感染の最盛期であり、降雨が続くと被害が多くなる。薬剤防除を徹底する。
- (2) 果実での感染を防ぐために、袋掛けは早めに行い、袋掛けの直前には必ず薬剤を散布する。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年並（前年比少ない）

予報の根拠

（１）５月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	0.0	0.4

（２）向こう１か月の気温は高く（－）、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）発病適温は15～25℃である。
- （２）雨が降り続き、低温が続くと発生が多くなる。
- （３）赤ナシは発病しやすいので、予防的に防除する。

3 ブドウ ベと病

予報内容 発生量：平年並（前年比少ない）

予報の根拠

（１）５月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	0.0	0.01

（２）向こう１か月の気温は高く（－）、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）初発生は、葉より花穂からの場合が多い。
- （２）発病適温は22～25℃である。
- （３）5～6月に多雨であると多発生となる。
- （４）ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。
- （５）本病は新しい柔らかい組織に発生しやすいため、窒素肥料の多施用は避ける。

4 カキ 落葉病

予報内容 発生量：平年比やや少ない

予報の根拠

（１）昨年10月は、発生を認めなかった（平年比少ない）（－）。

項目	昨年10月	平年値
発病葉率(%)	0.0	12.7

（２）向こう１か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）角斑落葉病と円星落葉病があり、前者の発病は7月から、後者は9月から見られる。両病害とも、主な感染時期は6～7月で、前年の被害葉(落葉)に形成された前者は分生子、後者は子のう胞子が第一次伝染源となる。降雨の多い年ほど被害が多い。
- （２）慣行防除が行われている園では被害が少ない。

5 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生を認めていない(平年比やや少ない)(-)。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	0.0	0.5

(2) 昨年10月の発生量は平年並。

項目	昨年10月	平年値
発病葉率(%)	41.0	47.5

(3) 向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 前年の被害葉(落葉)や枝・幹の表面上に形成された子のう殻内の子のう胞子が第一次伝染源となり、5～6月から発病が見られる。

(2) 5～6月に降雨の多い年ほど被害が多い。

6 ナシ、カンキツ ハダニ類

予報内容 発生量：ナシ 平年並（前年並）
カンキツ 平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、ナシでは発生を認めず(平年並)、カンキツでの発生量は平年並。

作物	項目	本年	平年値
ナシ	寄生葉率(%)	0.0	0.8
カンキツ	寄生葉率(%)	1.3	10.4

(2) 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) カメムシ類等を防除するために、合成ピレスロイド系薬剤を連用した園では、天敵も防除されるために、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。

(2) 年間世代数が多く、薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統のダニ剤の連用は避ける。

7 果樹全般 カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) チャバネアオカメムシの越冬量は平年（例年）比やや多い(+)。

地域	項目	本年	平年(例年)値
丹後	平均生存虫数(頭/地点)	0.38	0.22
京都市及び南丹	平均生存虫数(頭/地点)	0.60	0.27

詳細は平成28年3月9日付け「防除所ニュース平成28年第1号」参照。

<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news1.pdf>

(2) 5月第2半旬現在、予察灯への誘殺数は京田辺市で誘殺を認めず（平年並）、亀岡市、京丹後市で平年比やや多い（+）。

場所	本年	平年値
京田辺市	0	0.5
亀岡市	1	0.3
京丹後市	6	4.1

*誘殺数(頭)：5月第1半旬～第3半旬の合計値

(3) 5月第2半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は京田辺市で平年比やや多く（+）、亀岡市で平年比多く（+）、京丹後市で平年並。

場所	本年	平年値
京田辺市	1.0	0.2
亀岡市	13.5	3.6
京丹後市	0.2	1.3

*誘殺数(頭)：5月第1半旬～第3半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 園外から飛来し局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。
- (2) 夜行性であるため、夕方の防除が効果的である。
- (3) 合成ピレスロイド系薬剤の連用は、ハダニ類やカイガラムシ類の多発を招く場合があるので、注意が必要である。

*** 今後注意すべきその他の病害虫等は p 16 を参照**

チャ

1 もち病

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年並）
 丹波 平年比やや多い（前年並）
 丹後 例年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、山城、丹波、丹後とも発生を認めていない（平年（例年）並）。
- (2) 昨年10月のもち病の発生量は山城、丹波で平年比多く（+）、丹後で例年並。

地域	項目	昨年10月	平年値（例年値）
山城	病葉数	16.3	0.0
	発生ほ場率(%)	9.1	0.9
丹波	病葉数	15.5	0.4
	発生ほ場率(%)	33.3	6.7
丹後	病葉数	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

- (3) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多く（+）、日照時間は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または少ない（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病斑上に形成された担子胞子が風雨で飛散し、二番茶の新芽に感染する。
- (2) 気温20℃前後で湿度が高く、日照不足の条件下で多発する。

(3) 常発地や一番茶摘採後に病葉が認められる園では注意する。

2 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年並）
丹波 平年並（前年並）
丹後 例年並（前年並）
第1世代幼虫ふ化時期：
5月第4半旬～5月第6半旬（平年比やや早い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、山城、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。
- (2) 昨年10月の発生量は平年並であった。

地域	項目	昨年10月	平年値
山城	綴葉数(m ² 当たり)	0.8	1.0
	幼虫数(m ² 当たり)	0.0	0.1
	発生ほ場率(%)	36.4	9.8
丹波	綴葉数(m ² 当たり)	6.8	0.8
	幼虫数(m ² 当たり)	0.0	0.2
	発生ほ場率(%)	33.3	20.0
丹後	綴葉数(m ² 当たり)	0.0	0.0
	幼虫数(m ² 当たり)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

(3) フェロモントラップへの誘殺数は宇治で平年比やや多く（+）、綾部で平年並。

(4) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治と綾部で平年比やや早い。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、第1世代幼虫ふ化期は5月末～6月始めで、年4回世代を繰り返す。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。
- (3) 昨年、山城地域においてジアミド系及びDAH系IGR剤に抵抗性を発達させた個体群の発生が確認された。そのため、これらの薬剤の効果が低いと感じられる場合は使用を中止し、他系統の薬剤を使用する。

3 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年比やや多い）
丹波 平年比やや多い（前年並）
丹後 例年比やや多い（前年比やや多い）
第2世代幼虫ふ化時期：
山城 6月第3半旬～6月第4半旬（平年並）
丹波 6月第2半旬～6月第3半旬（平年比やや早い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、第1世代の発生量は山城で平年並、丹波、丹後で平年比や

や多い (+)。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生芽率(%)	0.1	2.5
	巻葉数(m ² 当たり)	0.7	0.4
	発生ほ場率(%)	15.8	23.3
丹波	寄生芽率(%)	0.0	0.1
	巻葉数(m ² 当たり)	2.7	0.1
	発生ほ場率(%)	50.0	10.0
丹後	寄生芽率(%)	0.0	0.9
	巻葉数(m ² 当たり)	0.7	0.0
	発生ほ場率(%)	33.3	12.5

(2) フェロモントラップへの誘殺数は宇治で平年比少なく(-)、綾部で平年比やや多い(+)

(3) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治で平年並、綾部で平年比やや早い。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 通常、年5回世代を繰り返し、5月下旬～6月中旬に第1世代成虫が発生し産卵する。

(2) 卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。

(3) 第2世代幼虫の発生時期と二番茶の生育が重なるため、被害が大きくなるので注意する。

4 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない(前年並)
丹波 平年並(前年比やや多い)
丹後 例年並(前年並)

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量は山城で平年比やや少なく(-)、丹波、丹後で平年(例年)並。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生・被害芽率(%)	0.7	7.6
	発生ほ場率(%)	21.1	57.7
丹波	寄生・被害芽率(%)	0.0	1.5
	発生ほ場率(%)	0.0	34.0
丹後	寄生・被害芽率(%)	0.7	1.2
	発生ほ場率(%)	33.3	34.4

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 主に二番茶以後に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。

(2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高いと多少の雨では影響が小さい。

(3) 一番茶期に密度が高かった地域では、二番茶の萌芽期から開葉期に十分注意する。

(4) 薬剤の使用に当たっては、同一系統の使用を避ける。

5 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年比多い(前年比多い)
丹波 平年並(前年並)
丹後 例年並(前年比やや少ない)

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量は山城で平年比多く(+)、丹波、丹後で平年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生葉率(%)	2.1	1.2
	寄生虫数(100葉当たり)	5.4	4.5
	発生ほ場率(%)	31.6	21.3
丹波	寄生葉率(%)	0.0	0.2
	寄生虫数(100葉当たり)	0.0	0.4
	発生ほ場率(%)	0.0	5.0
丹後	寄生葉率(%)	0.0	1.1
	寄生虫数(100葉当たり)	0.0	5.3
	発生ほ場率(%)	0.0	21.9

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 5～6月に多発し、10～30℃の範囲では高温の時ほど繁殖力が高いが、降雨により増殖が抑制される。
- (2) 通常、葉の裏側に生息するので、薬剤は葉の裏側にかかるように丁寧に散布する。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：山城 平年比多い(前年比多い)
丹波 平年比多い(前年比多い)
丹後 例年並(前年並)

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量は山城、丹波で平年比多く(+)、丹後で例年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生・被害芽率(%)	0.8	0.2
	発生ほ場率(%)	26.3	7.1
丹波	寄生・被害芽率(%)	1.3	0.2
	発生ほ場率(%)	33.3	8.3
丹後	寄生・被害芽率(%)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、二番茶期以降、発生が多くなる。
- (2) 二番茶の萌芽期から開葉期に加害されると、新芽の生育が著しく悪くなるので注意する。
- (3) 薬剤の使用に当たっては、同一系統の使用を避ける。

7 クワシロカイガラムシ

予報内容 発生量：山城 平年並(前年比やや多い)
丹波 平年比やや多い(前年比多い)
丹後 例年比やや多い(前年並)

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波、丹後で平年比やや多い(+)

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生株率(%)	6.3	15.0
	発生ほ場率(%)	52.6	57.3
丹波	寄生株率(%)	17.5	9.2
	発生ほ場率(%)	50.0	45.0
丹後	寄生株率(%)	35.0	10.9
	発生ほ場率(%)	100.0	21.9

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間3回（一部山間部では2回）発生する。1回目の幼虫ふ化期は時期が比較的揃っているため、この世代のふ化幼虫を対象とする防除は一年中で最も効果的である。なお、標高の高いところではふ化が10日程度遅れる。
- (2) 薬剤散布は株内部の枝に十分かかるように行う。
- (3) プルートMCを散布した茶園では、薬剤散布の必要はない。
- (4) 寄生が著しい茶園では、一番茶後すみやかに中切り、深刈りを実施し樹勢の回復を図る。

* 今後注意すべきその他の病害虫等は p 16 を参照

野菜

1 果菜類 疫病・褐色腐敗病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない。
- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は水媒伝染し、大雨の後に多発することがある。
- (2) ほ場の排水に努め、特に、降雨時の地表水は速やかに排水する。
- (3) マルチを行い、泥によるはね上げ伝染を防ぐ。また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。

2 キュウリ ベと病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	0.0	0.6
発生ほ場率(%)	0.0	10.8

- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 曇雨天が続くと、初発生及びまん延期が早くなる。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えると発病が多くなるので、肥培管理に注意する。

3 キュウリ・トウガラシ 斑点細菌病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

（1）5月中旬現在、キュウリで発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病株率（%）	0.0	0.0
発生ほ場率（%）	0.0	0.0

（2）向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）降雨等により病原細菌が飛散し、葉及び果実の気孔等から侵入して発病するが多い。
- （2）曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- （3）発生してからでは防除が困難となるので、予防防除に努める。

4 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

（1）5月中旬現在、ナスとキュウリで発生を認めていない（平年並）。

作物	項目	本年	平年値
ナス	発病株率（%）	0.0	0.0
キュウリ	発病株率（%）	0.0	0.1

（2）向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。
- （2）施設栽培で発生しやすく、高温乾燥天候が続くと発生が多い。
- （3）過繁茂を避け、肥培管理に注意する。
- （4）トウガラシ類では、ハダニ類による被害と判別が難しいので、被害葉を十分に観察する。

5 ネギ さび病

予報内容 発生量：平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

（1）5月中旬現在、発生量は平年比多い（+）。

項目	本年	平年値
発病株率（%）	19.0	0.7
発生ほ場率（%）	75.0	6.3

（2）向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）春から初夏に発生が多く、九条ネギは発病しやすい。
- （2）肥切れや窒素肥料のやり過ぎは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。

- (3) 多発すると防除が困難になるので、予防防除に努める。
- (4) 被害葉は伝染源となるのでは場周辺に放置せず、適切に処分する。
- (5) 詳細については、京都府病害虫防除所ホームページの情報（平成28年4月8日発表の防除所ニュース第2号（ネギべと病・さび病））
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news2.pdf>）を参照のこと。

6 野菜類 アブラムシ類とモザイク病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、アブラムシ類の発生量はキュウリで平年並、キャベツで平年比やや少なく（－）、ナスで平年比少なく（－）、ネギでは発生を認めていない（平年比やや少ない）（－）。

作物	項目	本年	平年値
ナス	寄生虫数（頭／葉）	0.03	0.34
	寄生葉率（％）	1.7	17.6
キュウリ	寄生虫数（頭／葉）	0.04	0.10
	寄生葉率（％）	2.0	7.8
キャベツ	寄生虫数（頭／10葉）	2.9	11.0
	寄生株率（％）	3.0	28.7
ネギ	寄生虫数（頭／葉）	0.00	0.05
	寄生株率（％）	0.0	3.9

- (2) 5月第3半旬現在、黄色水盤への誘殺数は平年並。
- (3) 向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。
- (3) 高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- (4) キュウリの急性萎凋症の発生の多いところでは、アブラムシ類の飛来に特に注意するとともに、ワクチン苗の利用も考慮する。

7 果菜類 ハダニ類

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量はナスで平年並、キュウリでは発生を認めていない（平年並）。

作物	項目	本年	平年値
ナス	寄生虫数（頭／葉）	0.003	0.024
	寄生葉率（％）	0.3	0.9
キュウリ	寄生虫数（頭／葉）	0.00	0.02
	寄生葉率（％）	0.0	1.1

- (2) 向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 高温乾燥が続くと、発生が増加する。
- (2) ハウス栽培では、天候に関わらず増殖しやすい。

(3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

8 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量はナスで平年比多く（+）、キュウリでは平年並。

作物	項目	本年	平年値
ナス	寄生虫数（頭／葉）	0.71	0.04
	寄生葉率（%）	11.7	2.8
キュウリ	寄生虫数（頭／葉）	0.19	0.31
	寄生葉率（%）	14.0	18.8

(2) 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い（-）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ミカンキイロアザミウマやネギアザミウマ等ウイルス病を媒介する種もいる。

(2) ハウスや雨よけ栽培では高温乾燥が続くと、特に多発しやすいので注意する。

(3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

9 アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年比やや多い

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、キャベツでの発生量は平年比やや多い（+）。

作物	項目	本年	平年値
キャベツ	幼虫・蛹数（／10株）	2.1	0.9
	寄生株率（%）	16.0	7.1

(2) フェロモントラップへの誘殺数は、亀岡で平年比やや少なく（-）、丹後で平年並。

(3) 向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い（-）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。

(2) 発生回数が多く（10～12回／年）、各発育段階（卵、幼虫、蛹、成虫）が混在する。

10 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比少ない（前年並）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量は平年比少ない（-）。

項目	本年	平年値
被害株率（%）	4.0	49.5
被害度	1.0	16.7

(2) 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い（-）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 5～6月が少雨の年に多発しやすい。
- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は、20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) 被害葉及び収穫残さが発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。

1.1 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年比やや多い（+）。

項目	本年	平年値
被害株率（%）	76.0	63.8
被害度	27.0	24.1

- (2) 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い（-）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。
- (2) 葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (3) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (4) 本種は府内各地で発生が問題となっているネギえそ条斑病を媒介する。
- (5) ネギえそ条斑病は、アイリス黄斑ウイルス（Iris yellow spot virus：IYSV）による病害で、本病の防除にはネギアザミウマに対する薬剤散布や、防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
 詳細については、京都府病虫害防除所ホームページの情報（平成27年防除所ニュース第5号
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/201511news.pdf>）や4月20日発表の発生予察注意報第1号（ネギアザミウマ・ネギえそ条斑病）
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tyuiho201601.pdf>）を参照のこと。

今後注意すべきその他の病虫害等

発生量を予報していない病虫害について発生生態及び防除上注意すべき事項を掲載しています。

果樹

1 カキノヘタムシガ・カキクダアザミウマ

果実の被害を防ぐため、開花終了後から6月下旬にかけて防除する。

チャ

1 炭そ病

- (1) 伝染源は、摘採されずに残った前茶期の病葉である。
- (2) 本病が感染するのは新葉に限られ、新芽生育期に降雨が続くと発生が多くなる。
- (3) 雨が多いと多発する。
- (4) 防除適期は、二番茶芽の第1～2葉開葉期である。

2 ツマグロアオカスミカメ

地域によって一番茶期に加害するもの、二番茶期に加害するもの、両方の茶期に加害するものがある。薬剤散布は萌芽期及び一葉期に行う。

3 チャトゲコナジラミ

平成28年5月中旬の巡回調査では、府内全域で成虫の飛翔している茶園を確認した。多発している園も認められるので園を見回り、発生の多い園では注意する。
本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

参 考

I 近畿地方 1 か月予報 (5月21日から6月20日までの天候見通し)

平成28年5月19日
大阪管区気象台発表

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

近畿日本海側では、期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。近畿太平洋側では、期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、近畿太平洋側で平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、近畿太平洋側で平年並または少ない確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

		低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温		10	40	50
降 水 量	近畿日本海側	30	40	30
	近畿太平洋側	20	40	40
日 照 時 間	近畿日本海側	30	40	30
	近畿太平洋側	40	40	20

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多く、日照時間は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または少ないと予想されている」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5日	6～10日	11～15日	16～20日	21～25日	26～最終日

2 発生量 — — — 病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値 — — — 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

「予報本文」の見方をチャノコカクモンハマキを例に示します。

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
丹波 平年並（前年並）
丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- （1）前年10月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
- （2）4月中旬現在、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	4月の調査結果	4月 平年値
山城	綴葉数 (/㎡)	3.0	0.1
	幼虫数 (/㎡)	0.5	0.0
	発生ほ場率 (%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数 (/㎡)	0.0	0.5
	幼虫数 (/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率 (%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数 (/㎡)	0.0	0.0
	幼虫数 (/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率 (%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- （3）4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- （2）通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- （3）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（-）、（+）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（+）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

IV 短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について

農薬の登録にあたっては、これまで、残留農薬の摂取量について、一日摂取許容量（ADI）を超えなければ食品安全上問題ないものと判断されてきましたが、今般、急性参照用量（ARfD）を超えないかという点についても評価されること（短期暴露評価）となりました。

今後、現在登録を受けている農薬について、順次、急性参照用量が設定されるとともに、短期暴露評価が実施されることとなります。

この結果、登録内容が変更される場合、変更登録が申請された段階で、農薬メーカーから変更登録の内容（商品名、変更事項等）が発表されます。これらの農薬は変更登録の前であっても、変更後の使用方法に基づいて使用するようになります。

（ご注意）

本内容は、国（農林水産省等）や農薬メーカーからの情報を府民の皆さまにお伝えするために掲載しています。したがって、掲載するまでに時間がかかることがあります。

1 最新の使用基準を確認して使用していただきたい農薬

※ラベルどおりに使用すると問題となることがあるため、最新の使用基準を各農薬メーカーのホームページ等で確認してください。

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
アセフェート (平成26年11月17日)	オルトラン水和剤、オルトラン粒剤、オルトランDX粒剤、 ジェイエース水溶剤、ジェイエース粒剤、 スミフェート水溶剤、スミフェート粒剤、 ジェネレート水溶剤、ジェネレート粒剤	適用作物削除 適用時期変更 適用回数変更 希釈倍率変更
カルボスルファン ベンフラカルブ (平成27年7月8日)	アドバンテージ粒剤、アドバンテージS粒剤、 ジャッジ箱粒剤、オンコルOK粒剤、オンコルスタークル粒剤、 オンコルマイクロカプセル、オンコル粒剤1、 ホームガーデン粒剤、オンコル粒剤5、 オンダイアエース粒剤、ガーデンホスピタル粒剤、 グランドオンコル粒剤、ガゼット粒剤	適用作物削除

2 今回の制度の導入により使用基準の変更があった農薬

※ラベルどおりに使用していただければ問題ありません。

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
ジメトエート (平成27年2月4日)	ジメトエート乳剤、ジメトエート粒剤 ベジホン乳剤	適用作物削除
フルバリネート (平成27年2月18日)	マブリック水和剤20、マブリックEW マブリックジェット	適用作物削除 使用時期変更
フェナリモル (平成27年2月18日)	ルビゲン水和剤、スペックス水和剤	適用作物削除

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
NAC (平成27年2月18日)	マイクロデナポン水和剤85 デナポン水和剤50	適用作物削除
シハロトリン (平成27年10月14日)	サイハロン水和剤、サイハロン乳剤、 ビリーブ水和剤	適用作物削除
メタフルミゾン (平成27年11月25日)	アクセルフロアブル	使用時期変更
ピリダベン (平成28年1月6日)	サンマイトフロアブル	適用作物削除
イプロジオン (平成28年4月20日)	ロブラール水和剤、ロブラール500アクア	適用作物削除 希釈倍数変更
ジラム (平成28年4月27日)	コニファー水和剤	適用作物削除

※ 変更の詳細については下記の農薬工業会のサイトにて確認することができます。
(要登録) また、上記の有効成分の農薬を使用されている方は使用方法をご確認の上、
使用していただきますようお願いいたします。

○参 考

厚生労働省(急性参照用量(ARfD))を考慮した食品中の残留農薬基準の設定について)

<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11121000-Iyakushokuhinkyoku-Soumuka/0000040984.pdf> (外部リンク)

<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11121000-Iyakushokuhinkyoku-Soumuka/0000040985.pdf> (外部リンク)

農林水産省農薬コーナー(農薬に関する施策関係)

<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/> (外部リンク)

独立行政法人農林水産消費安全技術センター(農薬登録情報の検索)

<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vt11m000.html> (外部リンク)

農薬工業会(使用制限にかかわる登録変更)

http://jcpa-seigen.jp/?page_id=5&reauth=1 (外部リンク)

※病害虫防除については、病害虫防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・京都乙訓	農業改良普及センター	075-315-2906
・山城北	農業改良普及センター	0774-62-8686
・山城南	農業改良普及センター	0774-72-0237
・南丹	農業改良普及センター	0771-62-0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773-42-2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773-22-4901
・丹後	農業改良普及センター	0772-62-4308

農作物病害虫情報サービス

・ホームページアドレス

<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病害虫防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－